

ウィリアム・サロイアンの青年時代と30歳代： 1932～43年の間のサロイアンの人生と文学

立 山 昇

(1997年1月21日受理)

I

サロイアンの青年時代は文字通り、悪戦苦闘の青年時代といえる。貧乏な家庭に育ち、少年時代から、家計を助けて、働いていたし、まさに、彼の人生の前半生は、悲しみの連続だったといえる。

しかし、サロイアンはそういう苦しい境遇に生まれ育ちながら、明るく、楽しい文学を作り上げていった。いったい彼の文学の根源はどこにあるのか、彼の明るい楽天、そして、ユーモアはどこからくるのか、それを探るための一つの方法は、彼の実人生を知ることであり、また、そうすることなしには彼の文学は理解できないといってよい。

この論考で私はサロイアンの1932年～1943年、つまり、彼が24歳くらいの頃から35歳くらいの頃までの人生を探求してみたい。すべての引用は *Places Where I've Done Time* からである。またこの論考における引用については、それぞれの引用の最後にページ数を記してある。すべての引用は William Saroyan, *Places Where I've Done Time*, Praeger Publishers, New York, Washington, 1972 から取っている。

II

サロイアンが生まれたのは1908年8月、カリフォルニア州フレスノ (Fresno, California) においてであった。1926年彼が17歳の時、故郷フレスノを後にしたのであった。そして、サロイアンはロサンゼルス、サンフランシスコ、そしてニューヨークと移り、ついにまたサンフランシスコに帰ってきた。そこで家族とともに暮らし始めた。1929年に彼はサンフランシスコに戻ってきた。そこで仕事もし始め、また文学修行も続けた。ニューヨークでの生活をサロイアンは大失敗だった、といっているが、それは彼が「富」と「名声」とを手に入れることができなかった、という意味に解釈できる。

III

サンフランシスコに帰ってきたサロイアンは、しばらくは、失意の気持ちを抱いていたようだが、現実感覚を取り戻そう、足を地につけて生活をしよう、という新たな決意をしたのである。

この論考ではサロイアンのエッセイ集 *Places Where I've Done Time* (折々の記) の中に出てくる記述を取り上げ、彼の人生と文学について論じたい。1933年のことについてのことの中に、Jim Tully という無名の作家のことが書かれている。その essay によると、その人は、ロサンゼルスにある The Mark Twain Hotel に部屋を借りていて、作家活動をしているが、芽のでない作家である。サロイアンは書いている。

He was a writer, from somewhere in Ohio, and he went out to Hollywood as a young man, after a number of years on the railroads of the country—a hobo. (p. 123)

ジム・タリィは、もともとホーボーであった。列車に乗って移動し、アメリカ各地を点々と、気の向くままに移動し、仮寝をする、いわば、無宿者といった者の一人であった。が、やがて作家になって、住みついたところがロサンゼルスであったらしい。今では自分の home を持っているのに、それとは別にこのマーク・トゥエイン・ホテルに部屋を借りて、毎日そこへ行って、仕事をしていた、つまり作家の仕事をしたのであった。そしてその作家のタリィは世間には知られることのない無名の作家であった、ということだ。

こういう作家たちとの交流は、彼の文学形成のために大変重要であった、と思われる。

1933年の記述は以上の一つのエッセイのみであるので、その年のその他のことについては、この『折々の記』を読む限りは、詳しいことはわからない。

IV

さて、1935年はサロイアンが27歳くらいの頃のことになるが、『折々の記』の中には、この年のことが多く取り上げられている。まず、パリに最初に行った時のことだ

が、その時のことがでてくる。

I was there, I myself, in person, not a dream, not a movie, and the world was a pretty girl I meant to get. I was sure Paris was the place to have her. (p. 63)

サロイアンは1935年4月に、念願が叶って、ついに、パリに行くのである。それを、「夢ではない、映画ではない」、本当のことなのだと、自分に言い聞かせている。そして、パリに行って、かわいい女の子を手に入れよう、そうできる場所はパリなのだ、というのである。

そして、サロイアンは女のいる店に行く。そこには、いろいろな女がいる、その中から、1人の女を選ぶ。彼は言う。

It was heaven. But it was hell trying to choose only one out of the dazzling lot. At last I chose a big girl, perhaps from Germany,...

We retired to a room with a bed, surrounded by mirrors. (p. 64)

そこには、少なくとも、two dozen girls (p. 64. l. 12) (たくさんの女たち) がいた。その中から一人のドイツ出身と思われる女を選び、その女と二人で、ベッドのある部屋に行くのである。これは彼のパリでの楽しい思い出を語っていて、おもしろい。自分の体験をありのままに、素直に語っている、といえるだろう。

V

さて、次に出てくる1935年についての記述は、まず、目立った記述では、サロイアンがニューヨークへ行ったということである。その時は、彼がすでに、最初の本を出版したあとで、サロイアンは、すこし名前が知られていて、やや有名になっていたのである。この頃は、ある程度の金もあったようで、以前泊まりたいと思っていたホテルに、その時、泊まるのである。その時の気持ちを、彼は次のように書いている。

I was delighted to be at The Great Northern, for the rooms were large, the bath was large, the ceilings were high, and (this may be difficult to believe) the rent was \$12 a week. From a room on the fifth

floor, number 512 I believe, an inside room with a poor view, I did the planning for my first trip to Europe, and I did some writing. (p. 79)

この The Great Northern Hotel は、部屋も大きくて、天井は高く、泊まり賃は以外にも安い、そのホテルの部屋に泊まって、そこで、最初のヨーロッパ行きの計画をたてた。そして彼は執筆もした、というのである。このヨーロッパ旅行については、前節でパリ旅行として述べた通りであるが、彼は最初の出版をしてから、世に少しは名前が知られるようになり、プロの作家としての第一歩を歩き始めるのである。彼はこの essay の最後を次のように書いて締めくくっている。

I loved being at The Great Northern Hotel, and I went back to the hotel again and again when I was in New York—until at last it just wouldn't do any more: the hotel had changed, I had grown more worldly, I had become wealthy, and the world itself had changed, so I moved on and up, as the saying is. (pp. 80-81)

The Great Northern Hotel を、その後、サロイアンは、気に入ったらしくて、何度も何度もニューヨークに来たら、泊まっていた、が、そうこうするうちに、彼は有名になり、また、金持ちにもなっていたが、最後には、他のホテルに変わっていったらしいことが、わかる。

VI

1935年に、サロイアンはメキシコ旅行に出る。なぜ、そうしたかについては、彼は詳しく書いているが、p. 108 に書かれていることを要約すると、彼の父が Sanger, California で働いていたことがあること、そのサンガーというところはメキシコ国境の近くだったこと、それに、1924年（彼の父が死んで13年後に）彼が16歳くらいの時に、その父の働いていたところの近くで、自分も働いていたことがあること、そしてそこで、メキシコ人たちと働いていたことがあること、従って彼はスペイン語も少しは覚えたのであった。そのようにして彼はメキシコに興味を持っていたので、1935年に初めて彼はメキシコ・シテイを訪れたのであった。

The land itself was Mexican. It was dry, sandy, rocky, hot, and heavy

with many kinds of desert plants. It had repose, dignity, and a sense of the fierceness of survival—not just human survival, but *all* survival, animal, insect, bird, and plant. And then, when people of Mexico appeared beyond the train windows, this isolation, struggle, and heroism, marked in their faces. (p. 109)

メキシコの土地は survival (生き残り) のために、人間のみならず、動物、植物、などあらゆるものが、生き残るために、厳しい環境である。そういうことから、repose, dignity, fierceness といった感じが生じているという。さらに、人々の顔にも isolation, struggle, heroism がはっきりと読みとれるというのである。サロイアンはメキシコへの旅で一つは父の面影を求めているようだ。父がカリフォルニアの南端のメキシコとの国境近くの農園で働いていた時に、サロイアンは生まれた、といているので、父は、フレズノを離れて、単身で出稼ぎに行っていたのだろう。そして、そのブドウ園で、働いていたのである。サロイアンが27歳くらいの時(1935年)にメキシコへ旅をしたのだから、その頃も、彼はずっと父の面影を求めていた、といえるようだ。サロイアンが3歳の時父は死んだので、彼は父のことをほとんど記憶してはいないだろうが、しかし、そのかすかな父の面影を求めての旅をしていると、いってよいだろう。

VII

さて、1935年サロイアンはヨーロッパ旅行にでかける。船に乗って、ヨーロッパ、イギリス、フランス、ロシア、そして、自分の父祖の地アルメニアにも行った。最後にはサンフランシスコに帰ってきた。ところが、その旅の途中で、彼は、病気にかかる。そのことをサロイアンは次のように述べている。

In any event, it was in Tiflis that I took quite sick one night after a meal of spoiled food. I got over this sickness, or enough over it to continue my travels, and to return to London, New York and San Francisco—without any help from the medical profession. (p. 175)

Tiflis というのはジョージア州で、彼はそこで病気になるが、大したことはなくて、回復した。それで、旅より、サンフランシスコへ帰ってきたのである。ともかくも、大

旅行を終えて、帰ってきたのである。

この頃のサロイアンは、一応、本を出版して、世間にも少しは知られ、さらに、金も入ってきていたので、このことで、彼は作家の仲間入りをしている、と考えてよかろう。つまり、修行時代を終えて、作家生活に入っている、とあってよかろう。

VIII

Places Where I've Done Time の中で 彼自身についての記述は1938年のことが、次に出てくる記述になる。そこには、一つの注目すべきことが述べられている。それは、ある女性との交際についてのことである。それはいかなる女性であるのか、という素性については、詳述されてはいないので、はっきりとはわからないが、サロイアンにガール・フレンドが出来たということは、確かである。その女性はサンフランシスコのアパートに住んでいて、彼女の部屋からは、ゴールデンゲイト・ブリッジがよく見えるところである。

その女性にサロイアンが電話をかける。彼はその辺のことを次のように書いている。

And it seemed that no matter when I phoned the woman said, "Come on up, the door's unlatched. If I'm asleep help yourself."

And so, going in, I'd look down the hill at the Golden Gate, fix a big drink, take a big swallow, light a cigarette, inhale, and go into the next door for a look at the woman—large, well-made, honest, and smelling like all the rest of the truth of the human race in the world: that part of the truth that just isn't in anything other than a handsome and honest woman. (pp. 26-27)

女性と親しくなって、その女性のアパートへ行って、いっしょに過ごす。もちろん、肉体的な関係も含めた付き合いをしているのはまちがいないと、考えてよかろうが、その女性は、簡単な、月並みな表現で言うと、「すばらしい女性」と言うことだが、サロイアンはその女性の中に 'all the rest of the truth of the human race in the world' をかぎとったのである。女性としてのすばらしいものというよりは、「人間としての真実」といったほうがよかろう。彼はその女性の中にそういうすばらしいものを、その女性の中にみ出したのであった。そのことはサロイアン自身に少なからず

影響を与えているだろう、ということはいえる。この essay のなかではサロイアンはこの女性をただほめているだけだが、そういう女性への態度は例外的であって、一般的には、彼の女性への表現は皮肉な場合が多いようである。

サロイアンと母親との関係を詳しく調べてみると、彼の女性観形成の上においてこれらの母親との関係が大きな意味を持っている、ということがわかるのではなかろうか。ここではある一人のサンフランシスコの女性が彼にとって「よりよきもの」であったということが我々には理解できるのみで、それ以上の事は、この essay を読む限りでは、我々にはわからない。1938年ということは彼が30歳くらいの頃ということになる。やっと一応の名声が与えられて、また世の中にも少しは、知られるようになってきていたのであった。そのような、一応の安定した彼の生活に一人の女性がいた、ということを知るのである。

IX

前にサロイアンはニューヨークでは the Great Northern Hotel に長く泊まったと書いたが、彼はその後そこでは別なホテルに泊まるようになったと、彼自身書いているが、その後者のホテルは the Hampshire House というホテルであった。そのホテルに泊まって彼はニューヨーク滞在をするのである。1939年サロイアンが31歳くらいの頃彼はサンフランシスコに家を買う。その家は3階建てであって、そこに彼と彼の母の Takoohi と sister の Cosette とが住むのである。そうしつつ、彼はメキシコ、ヨーロッパ旅行へでかけて、帰ってくる。そして、さらにニューヨークへ出かけたりするのである。(p. 117) その旅の途中で次のようなことが起きる。

Besides all the travel, and all the work, there was always a great deal of eating, drinking, and fooling around. Girls and women were abundant, and with enough alcohol down the gullet selectivity was put off until next time. But I did draw the line on a girl who took the service stairs at the Hampshire House,... (p. 118)

これは一つのエピソードである。ニューヨークのハンプシャー・ハウス・ホテルに泊まっていたら、一人の女性が彼を訪れてきた。その女性は 'obviously repressed, terribly excitable, and not quite right' (p. 118) であった。それでしばらく話していたら、彼女は一年間精神病院に精神的異常のために入院していたことを知る。そ

れで、彼は彼女を落ちつかせて、レストランへ行ってコーヒーを飲ませ、金を20ドル持たせて、やっと彼女を帰らせることができる。これなどは彼が少し有名になったが故の、アクシデントであるといえようが、有名になったといっても、何ほどのこともないと、彼は次のように言う。‘... and although I was famous and rich at last, I knew it really didn’t mean anything.’ (p. 119) つまり、金持ちで、有名になったからといって、それが何ほどのことであろうか、何ほどの意味もない、というのである。

X

1939年サロイアンが31歳くらいの頃、彼は作家としてある程度有名になり、金も入ってきていた。そのあたりのことを彼は次のように書いている。

And I had money, there was always plenty of money in my pockets, and I had earned the money. I had earned it by writing, not by working at some other job or other that I didn’t like at all. (p. 145)

当時彼はお金は十分に入ってきていたことは、この記述から、うかがうことができる。「私はいつもポケットにはお金を十分持っていた。」と言うのであるから、そのことがわかる。それを彼は作家活動をすることによって得ていたのであって、そのほかの仕事をする事によってではなかったのであった。また彼の作家としての活動は順調にいていたということが、わかる。いわば、彼の作家活動は充実していた時期であるということがわかる。これは彼が31歳くらいの頃のことである。

XI

さて次に1943年のことになるが、その年のことについて、この *Places Where I’ve Done Time* の中に1つだが、彼は essay を書いている。それは彼の軍隊でのことだが、ユーモラスなことが多いものの中で、これはかなり深刻なことを書いている。サロイアンはいう。

I was drafted with a bad upper-leg or low back condition, which when it was acute was the most painful thing in my limited experience

of pain—it was as violent and intense as the pain of a bad tooth, ... (p. 82)

この draft という言葉はどういう意味だろう。彼は「徴集」されたのである。つまり、第二次大戦に彼も兵隊にとられたのである。そしてその体験は楽しいものではなくて「苦痛」だったのである。その苦痛はまるで歯痛のようだった、のである。ところが、彼の場合は、幸いなことに、軍隊の、敷地内にはなくて、外に、つまり、自分の家に妻と一緒に住むことが出来たのであった。その当時、彼の妻は妊娠していた、と彼は書いている。

XII

これまでに、サロイアンの1943年まで、つまり、第二次世界大戦の頃までの彼の人生をたどってきた、ことになる。この論考では彼の24歳くらいから35歳くらい頃までを取り上げてきた。その時期はサロイアンにとって作家として若く、また希望に燃えていた時期であったといえる。名声もしだいにでてきて、そして、金も得られるようになって、生活も安定してきて、そして結婚をするのである。まさに彼の一生の中で最も充実していた時期であったといえよう。これ以降は、かれにとっては離婚という事も起こるわけで、そういった、時期に比べると、この時期は、楽天的であり、安定していたといえるだろう。そしてこの時期に彼の人生観及び文学が一応のまとまった形になったのではなかろうか。もっとも、その点については、この時期に書かれたサロイアンの諸作品を詳しく調べる事が必要ではあろうが。この論考では彼の *Places Where I've Done Time* に述べられている彼の文学と人生の姿をたどってみた。サロイアンはアメリカ作家としては、めずらしく自分自身をありのままに語る。彼の小説でさえも彼自身や自分の育った町、フレズノがよくでてくる。そういう点で彼の人生そのものはたどりやすいし、また彼は読者に自分を知ってもらいたいと、思っていたと、思われる。以上でこの論考を終わりたい。